

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

- 犬田切川通常砂防事業 -

名廻南遺跡

NAMEGURIMINAMI SITE

2004

伊那建設事務所
伊那市教育委員会

あ い さ つ

近年、埋蔵文化財に対する国民の関心度が急上昇で高まりを呈している状況下であり、伊那市におきましても、月見松遺跡、御殿場遺跡を代表とする数十箇所に及ぶ発掘調査を実施し、数えきれない程の多くの成果を収めてまいりました。

遺跡の保護に対し、最もふさわしい手段は現状のままで保護することが理想的でありますが、発掘調査と遺跡の保護は相反する行為と考えられる面もありますが、やむなく、消滅していく遺跡に対しては、記録保存という形で、後世に正しく残していくことが私どもの責務と信ずるものであります。

名廻南遺跡はこの報告書の中で後述してありますが、中央自動車道開鑿時に発掘調査を実施し、平安時代中期頃の堅穴住居址が1軒検出されましたので、今回の発掘調査に踏み切った次第であります。

実際に、発掘調査に取り掛ってみると、犬田切川の度重なる氾濫の為に砂礫層の堆積が厚く、調査地区に限っては遺跡の存在性は極めて希薄と判断でき、名廻南遺跡の範囲掌握には困難が伴うと思われます。

この調査に当たりまして、伊那建設事務所をはじめ、長野県文化財・生涯学習課各位の暖かいご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

また調査に際しましては、研究者をはじめ、伊那市西春近白沢地区の方々にご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

今回の調査で得られました成果が有効に活用されますよう念じつつ、あいさつに変えさせていただきます。

平成16年1月20日

長野県伊那市教育委員会

教育長 北原 明

目 次

あいさつ

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の環境	3
第1節 位置と地形	3
第2節 周辺の遺跡及び歴史的背景	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	11
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	11
第2節 発掘調査の組織	11
第3節 発掘調査日誌	12
第Ⅲ章 発掘調査	13
第1節 調査の概要	15
第2節 遺 物	15
(1) 土器	15
(2) 石器	15
第Ⅳ章 所 見	15

挿 図 目 次

第1図 位置及び西春近北部地区遺跡分布図	4
第2図 地形及びトレンチ・グリット配置図	13
第3図 出土土器拓影・出土石器実測図	15

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景
図版2 発掘調査状況及び遺物 出土状況

表 目 次

第1表 西春近北部地区遺跡内訳	5
-----------------------	---

第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位置と地形

名廻南遺跡の存在する西春近は伊那市の竜西地域（天竜川の西側地域を指している）南部に位置し、北側は小黒川を境にして伊那と、東側は天竜川を境にして東春近と、南側は大沢川を境にして宮田村と、西側は木曾山脈（別名中央アルプス）を境にして木曾谷とそれぞれ接している。前述した西春近地域は南北に8km程度、東西に2km程度の範囲を持ち、いわば、南北状に長く、その姿は極端に帯状を呈している。この一帯のほぼ中央部付近に「沢渡」と呼ばれている西春近地区で一番の繁華街が小さな町並みを形成しており、かつての西春近村当時の面影の残像を映し出している。

この「沢渡」の北端部で木曾山脈の前山である権現山山麓に源を発する犬田切川が東流して、天竜川と合流する。上伊那南部地域には「田切地形」と呼ばれる所が7個所にわたって存在しており、そのうちの「犬田切川」は最も北側の田切地形の一つに加えられる。

犬田切川水系—「流域は小さく、支流はほとんどない。山地に近いため直流型で、勾配も急傾斜である。伊那市地域の河川の中では、特に、急勾配の方に属する。季節的に流量・流速も変化し、堆積物の運搬も非常に多く見られる河川である。流路距離はこの地域の河川としては長く、勾配、流量、流速からみて水害の危険性が内在していると考えられる。」

遺跡の存在地域は行政的には伊那市西春近小出III区白沢地籍にあり、沢渡から犬田切川に沿って2km程西方に行った近くに中央自動車道が通過している。白沢集落の南端部、犬田切川に面した西から東へ延びる比高数mの左岸河岸段丘突端面上にあり、一度、大雨が降れば、浸水の危険性が生じるようなところに位置している。

なぜ、このような場所で発掘調査を実施したかとの疑問を持たれる方がいるかと思われるが、実は、昭和47年度中央自動車道開鑿時に発掘調査を実施したところ、灰釉陶器を伴った平安時代中期頃の堅穴住居址1軒が検出されたからである。この住居址については詳細な報告書が刊行されており、実態を知りたい方は是非とも一読を願うものである。

第2節 周辺の遺跡及び歴史的背景

今回、発掘調査を実施した地点は前述で述べたように水害の危険性に直面している状況下であったので遺跡の存在性は極めて希薄であると判断して調査に取り掛かった。

調査を実施してみると、やはり、想定していた通り、何回にもわたる水害があったと見て、厚く何層にもわたり砂層や砂礫層が堆積しており、この中から後述するような遺物の検出があったのみであり、この事実は名廻南遺跡のうちでも今回の調査地点は生活の居住空間ではあったが、単なる遺物散布地帯に該当すると考察せざるを得ない。

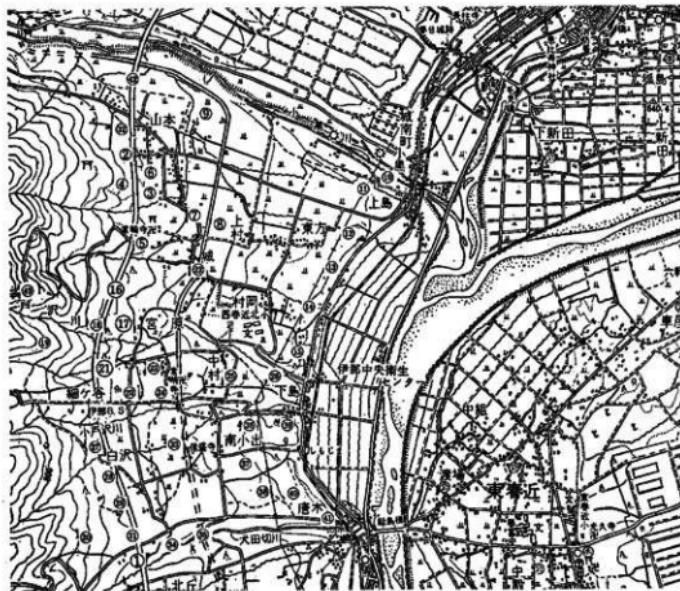
今回の調査地点より西方へ500m程行くと「寺屋敷」と呼ばれている平坦地があり、ここに、

現在、伊那市東春近光久寺の前身があったと伝承されており、現地へ行ってみるとかつての名残の遺構が見られる。現在、西春近小出Ⅲ区中村にある「深妙寺」もかつては「小殿寺」「山寺垣外」と呼ばれている山麓に存在したと伝承されている。これらの状況はかつての山岳仏教の強い影響力の現象であろう。

神仏を含めた山岳信仰については伊那市教育委員会平成14年度刊『伊那の中世伝説・山岳信仰』を参考にして頂ければある程度伊那市周辺の実態が理解出来る。

第1図位置及び西春近北部地区遺跡分布図には名廻南遺跡周辺の分布状態を図示し、引き続いて各々の遺跡内容を第1表にて記述しておく。これらの遺跡の内訳は『長野県史考古編』によっていることを付記しておく。

第1表の内で遺物については縦年学上での取り扱い方を採用してある。従って、名称が地域的に統一されていない個所が随所、随所に見られるが御容赦願いたい。それとは関東縦年、中央高地縦年、東海縦年等々である。
(飯塚政美)



第1図 位置及び西春近北部地区遺跡分布図 (1 : 30,000)

遺跡の名称

- ①名廻南 ②城平 ③常輪寺跡 ④宮林 ⑤山の根 ⑥山本 ⑦常輪寺下 ⑧上村 ⑨北条 ⑩上島下
- ⑪上島 ⑫東方B ⑬東方A ⑭村西北 ⑮村岡南 ⑯大境 ⑰中原 ⑲百歌刈 ⑳西垣外 ㉑細ヶ谷
- ㉒細ヶ谷B ㉓小出城（城南） ㉔宮の原 ㉕浜射場 ㉖中村 ㉗中村東 ㉘山寺垣外 ㉙白沢原 ㉚名廻
- ㉛名廻西古墳 ㉜名廻東古墳 ㉝城平上 ㉞兜塚 ㉟鎮護塚西古墳 ㉟鎮護塚東古墳 ㉟カンバ垣外 ㉞丸山城跡 ㉟南小出南原 ㉟薬師堂 ㉟唐木原 ㉟唐木古墳 ㉟山本田代 ㉟山王

第1表 西春近北部地区遺跡内訳

注: (縄) 縄文時代 (弥) 弥生時代 (古) 古墳時代 (奈) 奈良時代
 (平) 平安時代 (中) 中世 (近) 江戸時代

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
1	名廻南遺跡	西春近白沢	扇状地	(縄) 諸磯C式 晩期土器 打石斧 横刃形石器 (平) 壁穴住居1 灰釉陶器 (昭和47年発掘調査実施)
2	城平+	山本	+	(縄) 壁穴住居1 中期末・後・晩期土器 磨石 石棒 (平) 壁穴住居8 土師器 須恵器 灰釉陶器 砥石 刀子 (中) 地下倉3 小壁穴2 墓坑4 内耳土器 陶器(黄瀬戸 天目) 青磁 石臼 砥石 刀子 ピンセット状鉄製品 銛 火打金具 古錢 (昭和47年・57年発掘調査実施)
3	常輪寺跡	+	+	(中) 寺跡
4	宮林遺跡	+	+	(縄) 加曾利E式 打石斧 烧石 押型文土器 (昭和57年発掘調査実施)
5	山の根+	+	+	(縄) 前期土坑1 中期壁穴住居2 粗燃式 諸磯C式 加曾利E式 後期土器 打石斧 砥石 黒曜石片 胡桃 (弥) 壁穴住居1 中島式 (平) 壁穴住居4 小壁穴1 土師器 須恵器 灰釉陶器 銅製鏡 (中) 壁穴 内耳土器 天目茶碗 (昭和47年・57年発掘調査実施)
6	山本+	+	台地	(縄) 中・後期土器 打石斧 (弥) 土器
7	常輪寺下+	+	扇状地	(縄) 中期壁穴住居18 土坑7 梨久保式 五領ヶ台式 平出III A式 阿玉台式 勝坂式 加曾利E式 大洞A・C式 (奈) 壁穴住居1 土師器 須恵器 (平) 壁穴住居1 土師器 須恵器 灰釉陶器 (中) 柱穴群 陶器(常滑 中津川 古瀬戸 美濃 黄瀬戸) 青磁 線羽口 (昭和49年発掘調査実施)
8	上村+	上村	+	(縄) 中期土器 打石斧 敲打器 (弥) 中島式
9	北条+	山本	段丘	(縄) 中期壁穴住居8 中期土坑4 配石1 勝坂式 加曾利E式 石鐵 打石斧 磨石 凹石 砥石斧 剥片石器 垦石 棒状石器 石錐

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
9	北条遺跡	西春近山本段	丘	(奈) 壊穴住居1 土器類 須恵器 陶器 (平) 壊穴住居2 土器類 須恵器 灰陶器 (昭和49年発掘調査実施)
10	上島下	上島	下	(繩) 黒浜式
11	上島	タタタ	タタタ	(先) 剥片 (繩) 前期壊穴住居2 小壊穴2 木島式 北白川下層式 黒浜式 諸磯A・B・C式 大歳山式 打石斧 磨石 蔽石 石皿 縄器 橫刃形石器 棒状石器 (平) 壊穴住居1 小壊穴1 土器類 須恵器 灰陶器 (昭和48年発掘調査実施)
12	東方B	東方	タタタ	(繩) 中期土器 打石斧
13	東方A	タタタ	タタタ	(繩) 前期壊穴住居1 小壊穴1 ロームマウンド2 大歳山式 下島直後型 堀ノ内式 加曾利B式 打石斧 棒状石器 砥石 (弥) 壊穴住居1 座光寺原式 (中) 内耳土器 青磁 (昭和49年発掘調査実施)
14	村岡北	村岡	タタタ	(繩) 壊穴住居1 平出III A式 五領ヶ台式 阿玉台式 加曾利E式 打石斧 磨石 石錐 (弥) 石包丁 (中) 堀1 道路址1 内耳土器 陶器 砥石 宋銭 (昭和49年発掘調査実施)
15	村岡南	タタタ	タタタ	(繩) 中期壊穴住居1 土坑4 中期土器 打石斧 磨石 四石 磨石斧 剥片 (中) 内堀 外堀 柱穴群2 地下倉2 内耳土器 陶器 (黄瀬戸) 石臼 (昭和49年発掘調査実施)
16	大境	宮の原	扇状地	(繩) 押型文土器 加曾利E式 局部磨製石斧 石皿 (平) 壊穴住居2 小壊穴1 集石1 土坑1 土器類 須恵器 灰陶器 須恵質針綱車 (中) 中世陶器 砥石 青磁 (昭和47年・58年発掘調査実施)
17	中原	タタタ	タタタ	(繩) 後期土器 打石斧 四石 (昭和49年発掘調査実施)
18	百駄刈	タタタ	タタタ	(繩) 早期土坑 後期壊穴住居6 配石 特殊遺構 桶円・山形押型文土器 烂糞文土器 堀ノ内式 加曾利B式 石錐 打石斧 四石 磨石 磨石斧 橫刃形石器 石錐 蔽打器 石棒 小型土器 土偶 炭化物

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
18	百駄刈遺跡	西春近宮の原	扇状地	(平) 壺穴住居 土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄製鍊鉋 刀子 鉄針 鉄釘 (昭和47年発掘調査実施)
19	西垣外	小出	タ	(縦) 加曾利E式 打石斧 故石 凹石
20	細ヶ谷A	細ヶ谷	タ	(縦) 中期土器 打石斧 橫刃形石器 (昭和54年発掘調査実施)
21	細ヶ谷B	タ	タ	(縦) 早期土坑6 中期土坑1 後期土坑3 晩期土坑1 山形・椿円・格子目押型文土器 捺糸文土器 茅山式 鶴ヶ島台式 中期切頭型式 後・晩期 土器 磨器 特殊磨石 打石斧 石鏃 石製円板 (昭和47年・58年発掘調査実施)
22	小出城(城南)	城段丘	タ	(縦) 前期壺穴住居1 中期壺穴住居2 小壺穴20 茅山式 諸磯C式 下島式 石鏃 打石斧 磨石 磨石斧 石匙 スクレイパー 砥石 棒状石器 (中) 内耳土器 (昭和49年発掘調査実施)
23	宮の原	タ	タ	(縦) 打石斧 故石斧 石錘 (平) 壺穴住居1 土師器 須恵器 灰釉陶器 (中) 墓坑1 暗渠1 内耳土器 陶器(天目 古瀬戸 中津川 黄瀬戸) 戸 石臼 (近) 墓坑1 陶器 古錢(寛永通宝) 煙管 (昭和52年発掘調査実施)
24	浜射場	宮の原	タ	(縦) 前期壺穴住居2 中期壺穴住居2 茅山式 諸磯C式 下島式 下島直後形式 坂式 加曾利E式 堀ノ内式 加曾利B式 大 洞式 石鏃 打石斧 磨石 磨石斧 石匙 石 スクレイパー 磨器 故打器 (中) 内耳土器 陶器(天目) (昭和49年・51年発掘調査実施)
25	中村	中村 下島	タ	(縦) 前期末壺穴住居1 前期末土坑1 前期末ローマウンド1 大歳山式 晴ヶ峰式 踏場式 四石 磨石 故 石 磨石斧 (弥) 後期壺穴住居6 後期土器 磨石斧 (奈) 壺穴住居1 土師器 (中) 堀 (昭和52年発掘調査実施)
26	中村東	タ	タ	(平) 土師器

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
27	山寺垣外遺跡	西春近白沢	扇状地	(縄) 中期土坑 木島式 中期初頭型式 加曾利E式 晩期土器 (中) 溝状遺構 青磁 金属製品 鉄片 (昭和47年発掘調査実施)
28	白沢原	◆ ◆	◆	(縄) 中期土器 打石斧 磨石 (平) 土師器 須恵器 灰釉陶器 (中) 陶器 (昭和47年発掘調査実施)
29	名廻	◆ ◆	段丘	(縄) 檜円押型文土器 (平) 壺穴住居1 溝状遺構1 土師器 須恵器 灰釉陶器 (昭和47年発掘調査実施)
30	名廻西古墳	◆ ◆	◆	(古) 円墳 横穴式石室
31	名廻東	◆ ◆	◆	(古) 円墳 横穴式石室 直刀3 刀子11 鐵錐35 金環5 衛2 白玉 6 紡錘車 土師器 須恵器 人骨片 (昭和47年発掘調査実施)
32	城平上遺跡	◆ 山本	扇状地	(縄) 中期土器 (平) 土師器 須恵器 (昭和47年発掘調査実施)
33	鬼塚	◆ 白沢	◆	(縄) 土坑 溝状遺構 集石 山形・格子目・市松押型文土器 戸田上層式 茅山式 木島式 加曾利E式 砧器 棒状石器 鐵打器 (平) 土師器 (昭和53年発掘調査実施)
34	鎮護塚西古墳	◆ ◆	段丘	(古) 円墳 横穴式石室
35	鎮護塚東	◆ ◆	◆	(古) 円墳 (直径18.0m, 高2.4m) 横穴式石室 直刀2 剣1 小刀1 管玉8 勾玉3 小玉 13 粢玉2 土師器 須恵器
36	カンバ垣外遺跡	◆ 南小出	◆	(縄) 早期末~前期初頭壺穴住居2 中期壺穴住居2 土坑6 木島式 梨久保式 平出皿A式 勝板式 打石斧 (平) 壺穴住居1 土師器 須恵器 (中) 壺穴住居2 小壺穴22 柱穴群4 水路1 溝状遺構1 内堀 中堀 外堀 井戸 集石1 内耳土器 青磁 白磁 陶器 (常滑 古窯戸) 整状石器 砥石 筒形状鉢製品 棒状鉄製品 鍔 火打具 古錢 (開元通宝 祥符元宝 天祐通宝 天聖通宝 熙寧元宝 元豐通宝 洪武通宝 永樂通宝) 烧米 小豆 (昭和53年・54年発掘調査実施)

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
37	丸山城跡遺跡	西春近南小出	段丘	(縄)中期土器 打石斧 (中)堀 小堅穴36 白磁 陶器(古瀬戸) (昭和54年発掘調査実施)
38	南小出南原々	南小出 下島	々	(縄)中期土器 石鏃 打石斧 石錐 磨石 (弥)方形周溝墓1 中鳥式 (平)堅穴住居1 土師器 須恵器 灰釉陶器 (中)堅穴住居1 堀1 柱穴群1 陶器(天目 黄瀬戸 志野) (昭和49年発掘調査実施)
39	薬師堂々	々 下島	々	(縄)中期土器 石鏃 打石斧 磨石斧 石錐 (弥)中鳥式 (平)土師器 須恵器 (中)青磁
40	唐木原々	々 唐木	々	(縄)諸磯C式 勝坂式 加曾利E式 打石斧 (弥)中鳥式 (平)土師器 灰釉陶器
41	唐木古墳	々 々	々	(古)円墳 横穴式石室
42	山本田代遺跡	々 山本	々	(縄)中期初頭型式 後期土器 打石斧 磨石斧 (平)堅穴住居6 小堅穴 土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄鏹 刀子 銃具 鉄滓 (中)土鍋 陶器(黄瀬戸 天目) (近)陶器 青銅製品 (昭和48年発掘調査実施)
43	山王々	々 宮の原	山腹	(平)灰釉陶器

中世に入ってこの西春近北部地域は小井豆氏が勢力を張っていた。小井豆氏の由来についてはさまざまの説が考えられているが、小井豆氏の祖は工藤氏であり、小井豆に長い間住んだことからその土地の名をとって小井豆氏と名乗ったと一般的に考えられている。小井豆氏の名が初めて出てくる文献として『吾妻鏡』があげられる。この事柄を時代順にそって列挙してみると次のようになる。

安貞3年(1229)正月3日、貞永2年(天福元年)(1233)正月2日、嘉禎3年(1237)正月3日、暦仁元年(1238)正月3日、仁治元年(1240)正月3日、仁治2年(1241)正月3日。

小井豆氏の動向について「小井豆文書」あるいは「工藤文書」と呼ばれている文書が5通残っており、これらの内容は譲状、安堵状、裁許状であり、古い順に列挙してみると次のようになる。

建長3年(1251)2月5日付の藤原能綱が嫡子師能に与えた譲状。

建長3年(1251)2月6日付の藤原能綱が庶子宮熊わういに与えた譲状。

建長3年（1251）2月5日付の藤原能綱の譲状により、鎌倉幕府は嫡子工藤師能に建長3年12月14日付で所領安堵の下文を出したいわば安堵状。

建長4年（1252）8月7日付の小井豆兄弟所領相論裁許状信濃国春近領小井豆弥二郎師能と舍弟宮熊が代馬保信と相論、小井豆二吉郷内の田の事、北条時頼之を裁す。

正応元年（1288）11月3日付の幕府小井豆道覚（忠綱）の訴を斥けて盛綱には例の如く弁済せしむ。これに対し幕府は北条貞時の名における下文を下している。

以上述べてきた小井豆一族は今は大きく脚光を浴びている「伊那春近領」の地頭代（地頭のすぐ下の役職）として権勢を誇っていたのである。

なぜ、ここで近世について触れるかというと、第1表のなかに近世に関連する遺構・遺物が検出されているからである。近世とは、日本歴史の中で江戸時代を指し、徳川家康の江戸幕府創設から明治維新までの約270年間の長きにわたっている。近世の遺物が検出するからには人々が住みついていた証であり、集落の存在が実証される糸口と成り得るのである。

第1図に表記した範囲は江戸時代では「小出村」と呼ばれ、同村の北半分地帯を指していると考えてもらいたい。ここでこの村について若干の注釈を加えておく。

江戸時代に入る直前の天正19年（1591）「信州伊奈青表紙之縄帳」（いわゆる太閤検地と呼ばれている）には、村位は下に位置づけられ、村高は「千四百拾弐石二斗六升六合 小井豆」とある。小出村は、江戸時代から明治8年まで続き、高遠藩領春近郷の一村に属している。村高は「天正高帳」では「小井手」として1412石余となっている。引き続いて「正保書上」には934石、元禄2年（1689）の「元禄郷帳」には1017石余、また、美鶴下川手春日卓爾氏所蔵の「御検見御領分中高附帳」には戸数130戸、人口998人、ほか馬243頭、漆、麦などが産物として記されている。「天保郷帳」には1036石余、「旧高旧領」には1103石余りとそれぞれ見られる。

また、正徳4年（1714）、木曾助郷の人馬役を命ぜられ、以後、幕末まで「元村」となった。「元村」とは常に人足や馬負担を割り当てられた村のことである。このことは現存する『小出郷倉文書』により詳細に理解できる。「小出郷倉」は伊那市西春近小出I区東方に所在し、この中の文書は丁寧に保管され、保存のために毎年夏場に定期的に虫干しを実施し、永久保存に努力している。

明治8年（1875）に小出村は西春近村となり、昭和41年（1966）に伊那市に合併し、現在に至っている。

（飯塚政美）

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった名廻南遺跡は犬出切川通常砂防事業に伴う緊急発掘調査であり、調査の実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記す。

平成14年10月11日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事、伊那市教育委員会生涯学習・スポーツ課職員、伊那建設事務所職員とで伊那市役所会議室にて三者協議を実施する。

平成15年5月14日付けで、伊那建設事務所長西原義久と伊那市長小坂権男両者間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を取り交わす。

平成15年6月6日付けで、伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（名廻南遺跡）団長御子柴泰正両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結する。

平成15年9月19日付けで、名廻南遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成15年9月19日付けで、名廻南遺跡埋蔵物発見届を伊那警察署長宛に提出する。

平成15年9月19日付けで、名廻南遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成16年1月8日付けで、伊那建設事務所長西原義久と伊那市長小坂権男両者間で変更委託契約書を締結する。

平成16年1月13日付けで、伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団（名廻南遺跡）団長御子柴泰正とで変更委託契約書を締結する。

第2節 発掘調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

委員長　登内 孝

委員　上島 武留

　　伊藤 晴夫

　　田畠 幸男

教育長　北原 明

教育次長　伊藤 隆

事務局　塙本 哲朗（生涯学習・スポーツ課長）

　　白鳥 今朝昭（生涯学習・スポーツ課長補佐　社会教育係長）

　　武田 一夫（生涯学習・スポーツ課長補佐　青少年係長）

　　飯塙 政美（生涯学習・スポーツ課主幹）

事務局 山口千江美(生涯学習・スポーツ課主査)
北林太()
田原節子()

発掘調査団

団長 御子柴泰正(長野県考古学会会員)
調査員 飯塚政美(日本考古学协会会员)
本田秀明(長野県考古学会会員)
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 那須野進 松下末春
小田切守正(敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成15年9月10日(水)伊那市考古資料館より、発掘現場近くの白沢古墳公園へ発掘機材を運搬し、そこにテントを一張り建てた。午後、発掘現場へ重機が到着し、それが発掘調査地区の最西端部に入り次第、北側を東西に第1号トレンチ、南側を東西に第2号トレンチと設定し、第1号トレンチを掘り進めていくと、薄手の北白川下層Ⅲ式一派の微片が出土した。東側はグリット掘りを進める。グリット名は東側から第1号グリット、西側に向かって第2号グリット、さらに第3号グリットと命名し、3つとも手をつける。

平成15年9月12日(金)発掘調査地区的最西端部は重機が前日より入り、掘り下げを進めていくと、第2号トレンチの中間地帯より頭首工の水門板に利用したと推定される鉄板の残りが砂層の中より出土した。災害の際に上流より流失したのであろうか。第1号トレンチの写真撮影を終了。午後より南側の第2号トレンチを掘り進めていくと、カキ目痕の明瞭な平安時代中期頃の土器片が出土した。第4~5号グリットを掘り進めるが、埋土の堆積が厚く、搅乱層が顕著であり、遺構・遺物の検出は何も無かった。

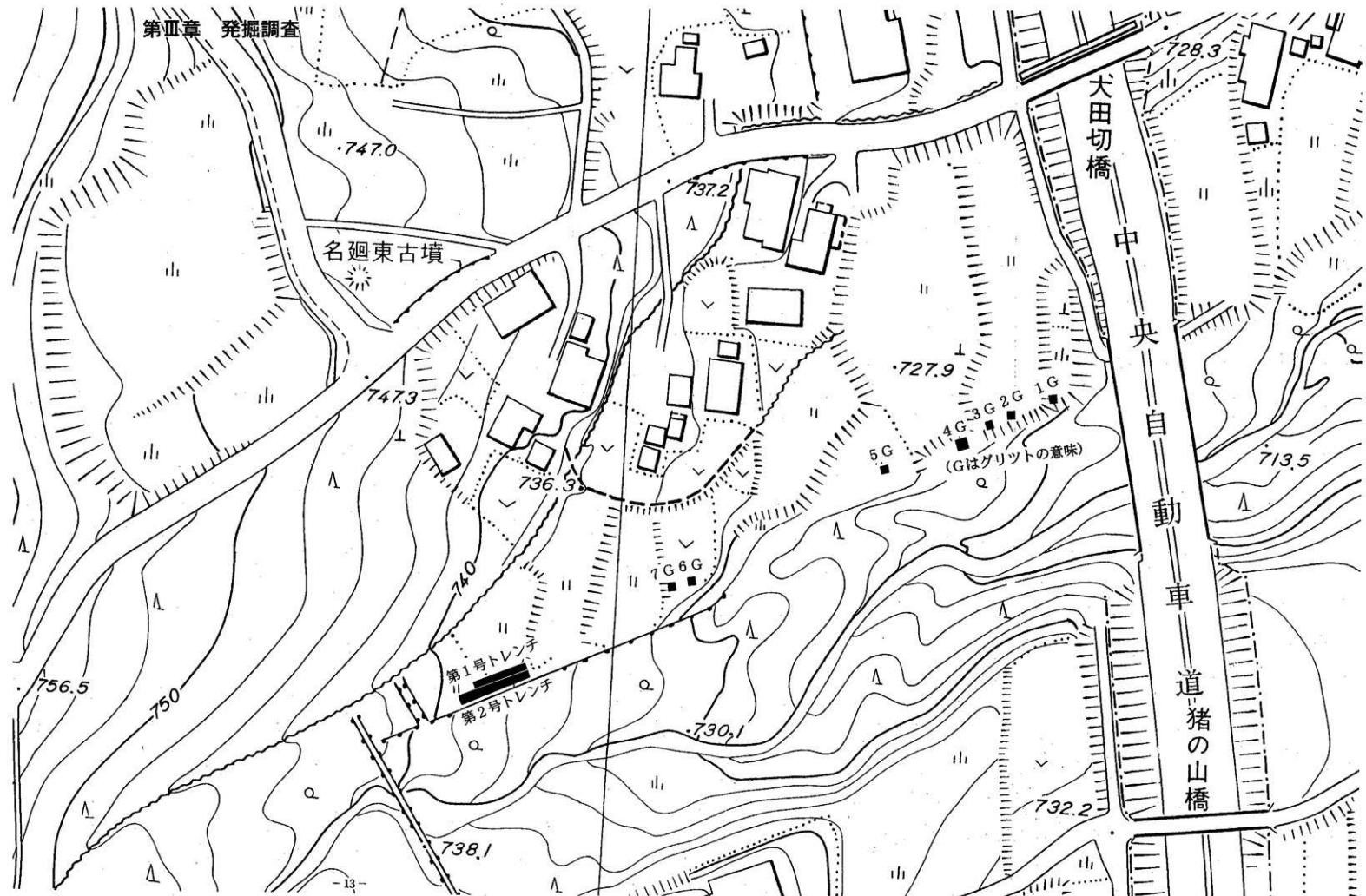
平成15年9月16日(水)第2号トレンチの完掘終了。写真撮影を東側と西側の二方向から撮影する。第2号トレンチの北側を東西にわたって実測し、それが済み次第埋め戻しをする。第6号グリット、第7号グリット掘りを実施するが、搅乱層が深く入り込んでおり、遺構・遺物の検出は何もなかった。第5号グリット北壁の東西セクション図の作成。このグリットにも厚く搅乱層が見られる。第1号グリットから第4号グリットまでの埋め戻しを完了する。

平成15年9月18日(木)午前中一杯かかる、第5号グリットから第7号グリットまでの埋め戻し作業を終え、午後はテントを撤収して後片付けをする。

平成15年11月~平成16年1月 報告書の図面、図版作成、原稿執筆、編集を終えて、印刷所へ入れて、印刷を開始し、校正を行い、1月の報告書刊行に努力を払った。

平成16年1月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

(飯塚政美)



第2図 地形及びトレンチ・グリッド配置図 (1 : 1,000)

第1節 調査の概要

名越南遺跡周辺は前にも触れておいたが犬田切川下流域に属しており、この河川の流域によって、遺跡地の存在範囲が限定されるのである。今回、発掘調査を実施した周辺は水田、畑に利用されていたが、砂礫層の堆積が厚く、逆に耕土は浅いので、作物の出来は悪かった。発掘調査地点は犬田切川の左岸に、河床から数m程度の河岸段丘の微高地に位置し、一度、大雨が降れば一瞬のうちに洪水に見まわれる状況下であった。従って、発掘調査を実施してみると、多くの洪水にあったと見えて、表土からわずかに下がったレベル面から砂礫層の混入が見られた。発掘調査結果はこの報告書の通りであり、遺構の検出は何もなく、遺物については第2節で述べる。

第2節 遺 物

(1) 土 器 (第3図)

掲載した土器片は第1号トレンチ(1~2, 4~5)、第2号トレンチ(3)、これらは全ての砂層中より出土した。その内訳は、(1)は2mm程度と薄手式に属する細片であり、拓影でははっきりしないがわずかに斜縞文が見られる。少量の長石、雲母を含み、焼成は良好で、黒褐色を呈する。縞文前期後半に隆盛した北白川下層Ⅲ式の一派と想定される。(2)は8mm程度の中厚手に属し、無文地に幅広で、浅いU字状の懸垂文が垂下している。小粒の長石を含み、茶褐色を呈し、焼成は良好。縞文中期後葉の加曾利EⅡ式の仲間であろう。(3~5)は平安時代中期頃の土器師長胴窯の破片であり、(3)は無文であるのに、(4~5)は同一個体でカキ目痕が見事である。

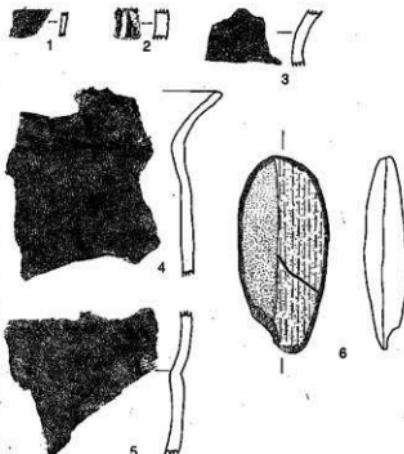
(2) 石 器 (第3図)

(6)は磨石の一種で、緑色岩の片面を半分位丁寧に研磨してある。

第IV章 所 見

今回の発掘調査地点は前述した通り犬田切川の氾濫地帯の一種に該当し、常に洪水の危険性にひんしておらず、遺跡の存在性はまずないと思われる。前述したように土器片は全て砂層中より出土しており、上流からの流れ込みによる。上流地帯に集落址の存在があり得るのかどうか、もう一度慎重に踏査してみる必要性があろう。

(飯塚政美)



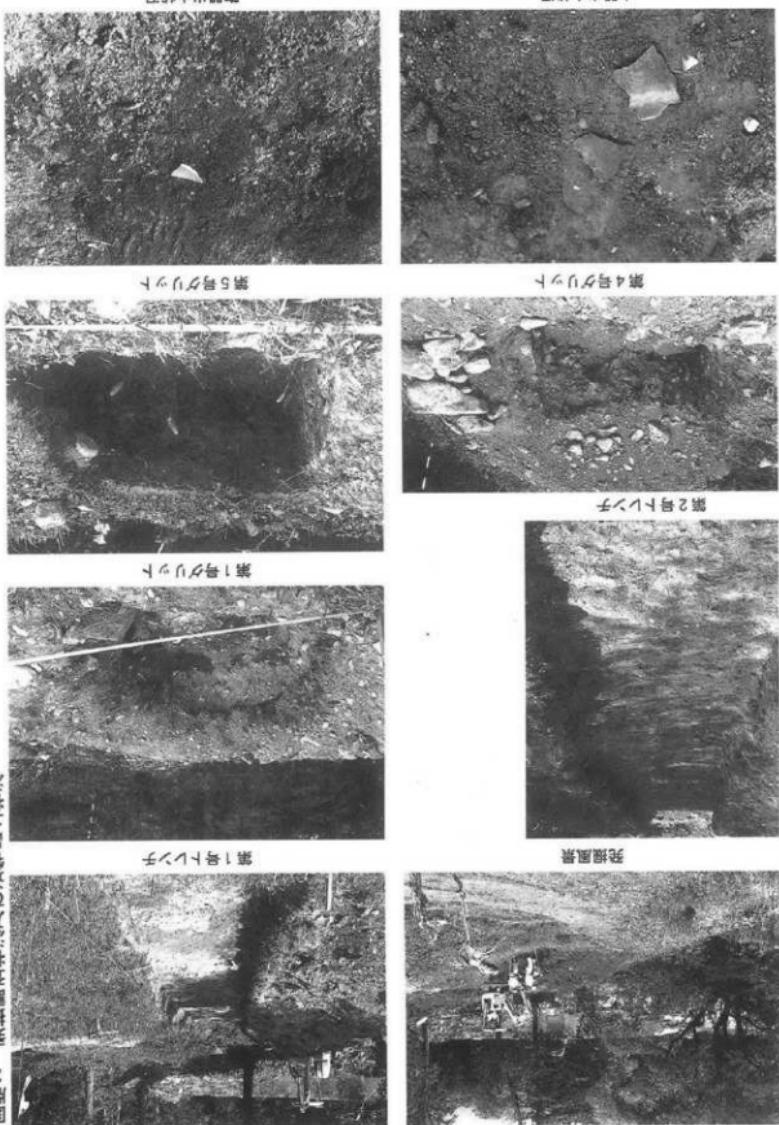
第3図 出土土器拓影・出土石器実測図 (1:3)



遺跡地を西側より眺む



遺跡地を東側より眺む



報告書抄録

ふりがな	なめぐりみなみいせき							
書名	名廻南遺跡							
副書名	犬田切川通常砂防事業							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書							
編著者名	御子柴泰正 飯塚政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦2004年1月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なめぐりみなみ 名廻南	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしほうちからさわ 西春近白沢	伊那市	101			平成15年 9月10日～ 平成15年 9月18日	90	犬田切川 通常砂防 事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
名廻南	散布地	縄文時代 平安時代 江戸時代	なし	縄文時代前期土器 縄文時代中期石器 平安時代土師器 江戸時代陶器	発掘調査を実施してみると、犬田切川の氾濫が何回もくり返されたと見えて厚く砂層や砂礫層が堆積しており、とても集落址の存在はありえないと判別出来る状況下であった。調査時に出土した土器片はその割れ口が非常に消耗しており、上から流れてきた可能性が濃厚と思われた。			
					従って、今回の調査地点より上流にはまだ確認されてはいないが、遺跡の存在性が十分にありえると思われる。			

名廻南遺跡

埋蔵文化財包藏地緊急発掘調査報告書
一大田切川通常砂防事業一

平成16年1月28日 印 刷

平成16年1月30日 発 行

発行所 伊那建設事務所
伊那市教育委員会
印刷所 伊那市 小林松総合印刷所

